



Title	「ほめ」が皮肉や嫌みになる場合
Author(s)	古川, 由理子
Citation	日本語・日本文化. 2010, 36, p. 45-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

「ほめ」が皮肉や嫌みになる場合

古川 由理子

1. はじめに

「夜遅くまでピアノの練習でご熱心なこと」。言語形式から見れば、これは「ほめ」だと解釈できる例である。この「ほめ」について大滝（1996）は、日独のほめことばの比較の中で、このような日本的な‘苦情の言い方’が、ドイツ人には理解しがたいものであると述べている。戸江（2008）は、発話者が悩みを切り出したい時に、持ち物や服装など相手に属するものをほめると述べている。このように、「ほめ」は使用される文脈において様々な機能を発揮する。「ほめ」とは、そもそも相手に関する肯定的評価を述べるものだと考えられる。本稿では、「ほめ」が、その方向性をあたかも逆にするのではと感じられるような、皮肉や苦情として機能する場合とはどのような時であるのか、また、その原因は何であるのかについて、今後の研究の展望を示したい¹⁾。

2. 先行研究—「ほめ」の機能

Holmes（1988）、小玉（1996）、古川（2003）、コーパーティアンウォン（2009）を参考にすると、「ほめ」は相手に関する何らかの対象について肯定的評価を行ない、相手を気持ちよくさせるものであると説明できる。

「ほめ」の機能は、先行研究では特に明確な定義はされていない。Holmes（1984）や Cameron, McAlinden, and O'Leary（1989）は、「一つの言語形式は文脈によってさまざまな機能をもち得る」とし、滝浦（2008）では、語用論的言語観として、機能について「「意味」が文脈に置き入れられた際の「機能」を問題にする」と述べている。本稿も先行研究のこのような言語観に従い、「ほめ」の機能を、「ほめ」が実際行なわれた文脈で担う役割、つまり、「ほめ」が相手やその場の状況

でどのようなことをするのかという意味で捉える。

それでは、先行研究ではどのような機能が「ほめ」に指摘されているのだろうか。それらを、相手に肯定的であるかどうかという点で大別すると、次のように整理できる。

〈肯定的なもの〉 励まし、慰め、感謝、好惡の表現（「好」に傾く）、あいさつ²⁾・

会話のきっかけ³⁾・相手への関心を示す／関係を強化する

〈肯定的でないもの⁴⁾〉 間接命令、FTA 軽減、FTA、追従・へつらい、お世辞、皮肉、嫌み

先行研究での「ほめ」の機能は、先述のごとく、「相手に関する何らかの対象について肯定的評価を行ない、相手を気持ちよくさせる」あるいは「相手との関係を強化し維持する社会的潤滑油として働く」とされている。しかし、実際に用いられる「ほめ」の中には、むしろその反対に働くことも、反対を意図して用いられることもある⁵⁾。つまり、皮肉や嫌みなど、一見「ほめ」をよそおいつつ、本来はまったく逆の方向を意図する「ほめ」である。これが1章で述べた最初の例に該当するもので、「ピアノが上手だ」という表現により、結果的に苦情を述べるという機能を文脈で行なっていると考えられる。このような「ほめ」は、言語形式上は相手を肯定的に評価するよう見せかけておいて、実はそれとは逆のことを含意するという、複雑なプロセスをたどるものである⁶⁾。

3. 「ほめ」が皮肉や嫌味になる場合

3.1 「ほめ」に関わる要因—対人関係・対象・条件

「ほめ」の機能に関わる要因についての研究は、これまでのところ行なわれていない。「ほめ」の機能の他の機能との相関については、ヴァンダーヴェーケン（1997）が英語の発話行為動詞の意味分析を行ない、その中で感情表現の発話行為動詞の意味表として、「ほめ」を含む動詞の相関を示している（p. 233 表5）。

一方、川口・蒲谷・坂本（1996）は、相手を気持ちよくさせる機能をもつ「ほめ」を「実質ほめ」とし、そうではなく、頗みごとの前置きなど、別の意図がある場合を「形式ほめ」と呼んで区別している。本稿で扱う、「ほめ」が皮肉や嫌味として受け取られる場合は、川口らの枠組みでは「形式ほめ」に相当すると考えら

れるが、川口他（1996）では「ほめ」が相手にとって否定的になるという明確な記述はない。それでは、「ほめ」にはどのような要因が関わっているのだろうか。

古川（2003）では、「ほめ」には上下・対等・親疎という対人関係に加え、「ほめ」の条件や対象が深く関わっていると仮定した。分析の結果、「ほめ」は上から下の関係よりも親しい関係の間でより行なわれ、逆の関係ではありません現れること、対等の関係でかなり多く行なわれていることが示されている。さらに、「ほめ」の条件としては、特定の文化圏での一般的な価値観・評価基準（社会的価値観）、ほめ手の個人的な評価基準・期待度・好み（個人的価値観）、ほめ手の専門的見地に基づく評価基準（専門的価値観）の3つを立てた上で、上から下への「ほめ」にはすべての基準が用いられるのに対し、対等の関係ではほとんどが個人的価値観に基づいて行なわれていると指摘する。また、専門的見地からの場合、上から下への「ほめが」特徴的であるとも述べている。「ほめ」の対象（何をほめるか）については、上から下の関係で、相手の行動・態度をほめる場合が突出しているのに対し、対等の関係では、受け手の容姿をほめる例を含め、「ほめ」の対象がかなり多岐にわたることも指摘されている。以上のことを踏まえ、川口他（1996）の規定する「形式ほめ」の中で「ほめ」が否定的に発せられる場合を、古川（2003）の対人関係・「ほめ」の対象・「ほめ」の条件という観点から考察する。

3.2 「ほめ」が否定的になる要素

3.2.1 「ほめ」の対象の不一致

次の例のように、ほめる側の意図が皮肉だと取れる「ほめ」も、実際に存在する（下線部が「ほめ」：下線筆者）。

1. （女性探偵アルバイト玉川さんが尾行していた男性、小和田君に）

「（省略）警察官だって不審尋問をする気も起らないぐらい、のほほんとした顔をしているんだもの。脳味噌内部が太平っていう雰囲気が外側まで滲み出ているんです」「あんまり褒めてるようには聞こえないな」「褒めてるわけじゃないですからね。でも、今日備考したりいっしょに街を歩いた印象からして、私にはそうとしか思えません」

『聖なる怠け者の冒険』森見登美彦（朝日新聞夕刊連載小説 09年9月26日）この例では、小和田君の態度が「ほめ」の対象になっており、「顔がのほほん

としている」ことや「太平という雰囲気」という具体的表現で「ほめ」が行なわれている。これに対し、ほめられた側の小和田君は「褒めてるように聞こえない」と言っていることから、当初、彼はこの表現を「ほめ」として受け取ったことがわかる。しかし、「ほめ」を行なった側の玉川さんが「褒めたわけではない」と言っているため、この例は「ほめ」を受け取る側が、「ほめ」と意図して発話されていないものを「ほめ」だと受け取ったと考えられる。しかし、一般的に考えれば、ほめられる対象である、小和田君の「平和的雰囲気」についてのコメントがなされているわけだから、それが逆に「攻撃的雰囲気」へのコメントなどと比べると、「ほめ」として受け取られても不思議はない。この場合は、「ほめ」の対象が「性質・態度」という、古川（2003）でも「ほめ」の対象としてよく使用されるとされたものであり、かつ否定的評価が加えられていないことから、「ほめ」を受け取る側は「ほめ」らしきものととらえたものの、「のほほん」「脳味噌が太平」と、否定的に取られかねない表現が、ほめられた側には皮肉または嫌味とうつったのであろう。しかし、ほめた側はそれを「ほめ」の対象とはみなしていないわけであるから、これは「ほめ」の対象の不一致と言える例だろう⁷⁾。

一方、「ほめ」に使われた表現から、「ほめ」が相手に皮肉だと解釈される場合もある（Cはほめる側、Rは相手）。

2. Context: Male complimenter to female acquaintance in an informal setting.

C. It's nice to see you in a nice skirt.

R. What you mean is "My goodness what's happened to the trousers."

(Holms 1987)

この例は、おそらくいつもスカートをあまりはかない女性の知人に、容姿についての「ほめ」を行なったものであり、「nice」という表現からも「ほめ」だと解釈されるが、ほめられた側からすると、気恥かしさもあってか、「どういう意味？」と切り返す結果となっている。「わたしがいつもはいてるズボンに何かあったってこと？」といった発言に見られるように、ほめられたというよりは、スカートをはいていることをひやかされたと受け取ったのであろう。この場合も、「ほめ」の対象の不一致が「ほめ」が皮肉や嫌味に受け取られる要因になっていると考えられる。

3.2.2 「ほめ」の表現の不一致——専門的基準の使用

逆に、表現形式は「けなし」だと考えられるが、相手に「ほめ」と解釈される次のような例もある⁸⁾。

3. (NHK 大河ドラマ「葵 徳川三代」で徳川家康を演じた津川雅彦が)

昨年6月からの収録を振り返って、津川は「静かで待ちの姿勢とされていた家康を、動の姿に、せっかちに演じた。私の家康を見て、もともと嫌いだった家康が、もっと嫌いになったという声も届いた。お褒めいただいたと思っています」と話していた。（朝日新聞 2000年5月19日夕刊芸能面）

ここでは「もっと嫌いになった」と、「ほめ」とは到底受け取られない表現が用いられているが、俳優としてはその演技を認められたということにつながり、その専門的見地から「お褒めいただいた」という解釈につながるのだろう。これは、発話した側は個人的基準で「ほめ」を行なったが、ほめられた側が「俳優」という立場による専門的基準を用い、その表現を「ほめ」であると解釈したと考えられる。

また、批判を「ほめ」だと相手が解釈する場合もある。

4. (市民のために、とベストセラーを30冊近く購入したりする図書館について)

公立図書館は市民のために存在している。実際に利用している市民の声に忠実にこたえていくことが大切で、「無料貸本屋みたい」という批判は、ほめ言葉と受け取りたい。（阪南大学講師・前田秀樹氏の話）

(「図書館 無料の貸本屋？」朝日新聞 1999年5月28日夕刊)

この例も、ほめられた側が「批判された」ととらえている図書館の行動について、専門的見地から、図書館は市民のために存在する、したがって、「誰でも無料で本が借りられる」という表現は「ほめ」として受け取ることができると判断していると考えられる。この齟齬は、ほめる側が用いた社会的基準と、受け取る側の専門的基準という、「ほめ」の基準の不一致によるものと推測できる。また、3と4の例は、相手との関係が疎（親しくない）の関係であることも重要である。親しい対人関係にある場合と違い、これらの例のような場合は、ほめる側の意図が正式には伝わりにくい。しかも、両例とも、ほめられる側の職業、いわば専門分野について行なわれたコメントである。そのような場合は、表現がどのような

ものであれ、受け取る側の専門的基準で「ほめ」かどうか解釈される場合があるのであろう。

3.2.3 パラ言語表現による解釈

相手側からの判断として、「ほめ」が皮肉や嫌味に受け取られる場合には、次のような例が見られる。

5. もし金川義助ほど上手に詩吟を吟ずることができたならばやはり、あのよ
うな態度を取るだろうと思っていた。「いつもながらうまいもんだな」加
藤は金川をほめた。無口のことについて、金川とひけを取らないほど
無口な加藤が、金川にそんなことをいうのはめずらしいことだった。金川
が、びくっと顔を動かした。金川には加藤の讃辞が皮肉に聞えたのである。
そう思われるほど、加藤のいい方はぶっきら棒であり、彼の顔には感動が
なく、むしろ皮肉と受取られそうな微笑が浮んでいた。

新田次郎『孤高の人』

この例では、「うまい」という、まさに「ほめ」と解釈できる表現が使われ、しかも詩吟という相手の能力を対象にほめている。「能力」は、古川（2003）で、「ほめ」の対象となりやすいと指摘されるものである。しかし、二重線部（筆者）からわかるように、ほめる側の言い方や表情、つまりパラ言語要素が「ほめ」を真意のないと解釈する大きな手がかりとなっている。次の例も「ほめ」の具体的な表現は不明であるが、同種のものである。

6. Mはぼくの陽に焼けた胸やつよい筋肉の束に包まれた脚その他をほめる
ために紋切型をいくつかならべたが、それはまるで採点のあとで講評する
女の教師の調子であり、また彼女はその中年の愛人の衰えたからだ
とぼくのからだを比較したが、それは比較解剖学の講義といったおもむき
があった。

倉橋由美子『聖少女』

以上のように、「ほめ」が皮肉や嫌味を意図して用いられたり、あるいは、ほ
められた相手にそう受け取られたりするのは、「ほめ」の対象や条件にずれがあり、
そこから皮肉や嫌味といった機能が引き出されるのではないかと考えられる。一方、対人関係も「ほめ」の対象や条件と密接に関わるものであり、5や6の例に

みられる対人関係（親しくて対等）が異なった場合、違った解釈（例えば、上から下への「ほめ」であれば、パラ言語要素が「ほめ」を否定しかねないものであっても、専門的見地からの「ほめ」だと受け取られる可能性が残される）もできるだろう。このように、相手を肯定的に評価し、気持ちよくさせる本来の「ほめ」が、皮肉や嫌味といった、相手を否定的に評価する機能に解釈されるのは、当該文脈における「ほめ」の対象の不一致、「ほめ」の基準の不一致、対人関係の相違などによるのではないかと推測できる。

4. 「ほめ」の機能の相関

本章では、「ほめ」が本来の機能とは逆方向を志向するかのような皮肉や嫌味に解釈される場合はどのような時かということを考えるために、他の「ほめ」の機能（先行研究で指摘されているもの）の相関を考える。まず、ある文脈で「ほめ」が行なわれた場合、その「ほめ」が成立したかどうかは、ほめた側の意図というより、ほめられた側の解釈が優先すると考えられる。かりに、この場合において、ほめた側の意図が皮肉や嫌味であった場合（1章で挙げたような、ピアノの音への苦情の例）、その「ほめ」は意図がどうあれ、「ほめ」として成立し、相手を気持ちよくさせる（＝相手の地位向上）という結果につながる。反対に、ピアノの音への苦情の例が、その表現とは裏腹に、苦情であると解釈される場合は、まず、「ほめ」は「ほめ」として受け取られ、成立するが、ほめられた側がその「ほめ」を苦情であると解釈したため、相手の地位を下落させるとでもいった働きをもつのではないかと考える。以上のことを図に示すと、図1のようになる。

「ほめ」は、相手に差し迫った情報を伝達しはしない。「ほめ」によって情報が伝えられるとすれば、それはほめる側の、相手への共感や好意である。このような情報は、川口他（1996）が「形式ほめ」の主要目的として述べている、「相手との関わり方についての態度」と同種のものと考えることができる。具体的には、「相手と話すきっかけを作りたい」「相手との関係を強化したい」「相手に対して配慮したい」「相手を喜ばせたい」などである。「ほめ」が伝えるこのような情報や態度は、情報内容の伝達というよりは対人関係的・社交的なものである。あいさつや感謝の表現など、対人的な機能が「ほめ」の機能として指摘されるのも、もっ

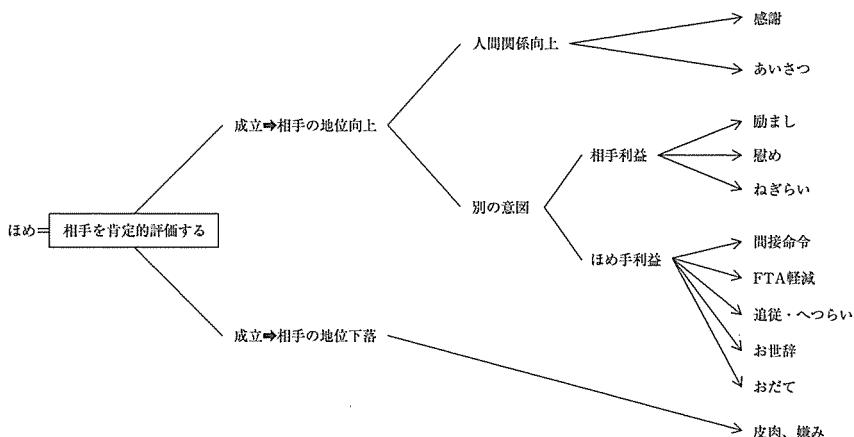


図1 「ほめ」の機能

ともなことだろう。これは、Malinowski (1923) の言う ‘phatic communion (交感的言語使用)’ つまり、沈黙を避け、社交的雰囲気を作るための言葉を互いに用いること⁹⁾ に含めることもできる。相手と交感するためには、原則として相手に対する態度が肯定的でなければならないからである。それでは、相手に対する態度が肯定的な表現を使用するにもかかわらず、なぜ結果的には相手を否定することにつながるのだろうか。図2は、多様な機能を「相手に対する態度」という観点から、肯定的か否定的かに分けて分類したものである¹⁰⁾。

図で否定的態度から肯定的態度へ上に向く矢印は、相手に対する態度は否定的であるが、肯定的な表現を使用する場合を示している(ピアノの音への苦情など)。また、発話形式が肯定的であっても、イントネーションや表情、笑いなどで相手に否定的な態度が伝わることも既に述べた。このような否定的態度は、肯定的だと分類したすべての機能に当てはまり、そのような場合は結果的に皮肉、嫌みとして受け取られる。これは、「ほめ」の機能のひとつに皮肉や嫌みが含まれると同様である。相手を肯定評価する「ほめ」が、そのまったく逆に機能するのは、「ほめ」を含め、皮肉や嫌みも、相手に対する態度を表明するという点で、同じ土俵上に位置しているからではないだろうか¹¹⁾。図2で示した下向きの矢印のように、表現は肯定的でも、パラ言語要素などにより、相手に否定的態度を表明す

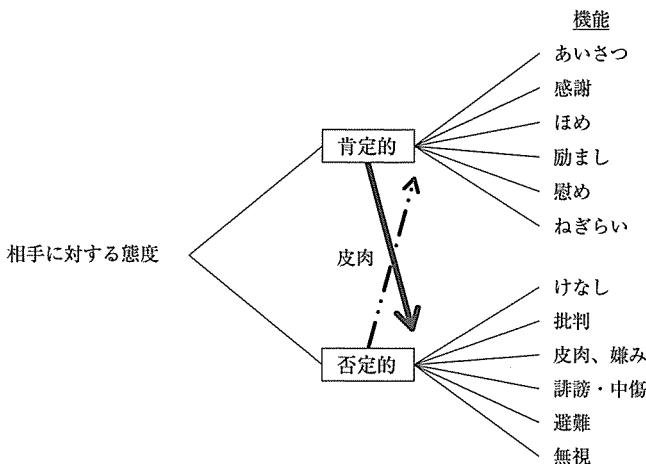


図2 相手に対して肯定的か否定的かによる機能

ることは可能であるからである。

われわれは日常のコミュニケーションを行なうにあたり、意図に応じて表現を選択し、現場の状況、文脈に即してそれにさまざまな機能を持たせ、最もふさわしい形で対人行動を行なっている。相手への態度表明に関わる「ほめ」が、結果的に種々の機能を担い發揮するのも、考えてみればごく自然なことであり、Holmes (1984) 他が指摘するように、「ほめ」も他の表現同様、多機能的であるのだろう。

5. おわりに

本稿では、「ほめ」を、相手に関する対象について肯定的評価を行ない、相手を気持ちよくさせるものととらえ、皮肉や嫌味といった、「ほめ」とは正反対とも言える機能をもつに至る場合はどのような場合であるのかをいくつか例示した。その際、「ほめ」の対象や条件の不一致、対人関係によって、「ほめ」表現が皮肉や嫌味、ひいては苦情として機能することがあるのではないかと考えた。

今後、この仮説を詳細に検討するためには、本稿で使用した文字資料ではなく、自然会話を例に取る必要があろう。本稿では、文字資料を利用したため、「ほめた」という記述が得られ、どのような表現であれ、発話者側が「ほめ」たかどうか、

あるいは受け取る側が「ほめ」だと解釈したかどうかという判断が得られたが、自然会話の場合は、「ほめ」だと第三者が判定するためには、相手に対する肯定的表現に限られるだろう。本稿の3や4の例で示したようなものを自然会話で「ほめ」として採取するのは非常に困難である。そこで、まず「ほめ」が皮肉や嫌味として機能する具体例を見るため、夫婦や友人など親しい関係における会話を分析することを手掛かりにすることを考えている。なぜなら、親しくない相手との対話においては、よほどのがない限り、肯定的評価をされた場合、隠された意図を詮索することはしないように思われるからである。しかし、相手と親しく、長い時間を共有し、相手のことをよく知った上で行なわれる会話であれば、共通の認識に立った上での、皮肉や嫌味としての「ほめ」が現れやすく、相手にもその隠された意図が理解しやすいのではないだろうか¹²⁾。さらに、このような自然会話においては、ほめた側とほめられた側の受け取り方の差異を検討するため、フォローアップインタビューができる環境が望まれる。

また、皮肉は非常に複雑なプロセスを経て行なわれるものであり、その方面的研究成果も加味して（例えばブレイクモア（1994）のアプローチ）、「ほめ」が皮肉（アイロニー）として用いられる場合の要因をより深く考察していくことが必要である。

註

- 1) 初鹿野・岩田（2008）のように、「ほめ」が複数会話において次話者を選択する場合を、会話分析によって行なった研究もあるが、本稿では会話における人間同士のダイナミックな関係ではなく、「ほめ」が相手に対してどのように働きかけるかに焦点を絞って考察する。
- 2) Wolfson（1983）は、しばらく会っていない者同士の場合に特にこの機能が表れるとして、‘cocktail party talk’ ではあいさつ後に「ほめ」が続く場合がほとんどであると述べている。
- 3) Wolfson（1983）などでは ‘conversation opener’ と呼ばれている。
- 4) ほめる側の意図として相手にとって肯定的でないものには、いわゆる「ほめ殺し」も含まれるが、他の機能と比べてまだ定着度が低く、「ほめ倒し」との混用も多く見受けられるので、ここでの考察からは省く。
- 5) 戸江（2008）で示されているように、ほめ手が、後に行なおうとする批判や頼み

ごとの軽減／緩和のために用いられる「ほめ」は、「ほめ」によって築かれた良好な人間関係に基づき、相手の気持ちをよくさせるということとは別のことと意図している場合である。ほめ手の隠された意図達成のための一手段であるお世辞も、これに相当すると思われる（これらは川口他（1996）（後述）の「形式ほめ」に相当する）。しかし、本稿では、これらの「ほめ」については相手の否定的評価につながるものでないため、ひとまず、考察の対象外とする。

- 6) 山路（2006）は、「ほめ」が時として攻撃的に使われる要因について分析している。
- 7) なお、この例は個人的基準の不一致による「ほめ」のずれと解釈することもできよう。
- 8) Brown and Levinson（1978）では、「She's not bad」という発言が‘She's very good’を暗示するのを、「a possible loaded FTA compliment」として FTA を用いて説明しているが（p. 265）、これも相手に対する態度が好意的であるのに、どちらかというと否定的な言語形式を使用している例であると考えられる。
- 9) Kenkyusha's new English-Japanese dictionary（研究社）による。尚、石橋幸太郎はこれらを「言語交際（社交における言語）」と訳している。
- 10) ここに挙げたものが機能のすべてというわけではもちろんない。図2では、相手に対して何かの態度を常に伴うと考えられるものを分類した。
- 11) 相手に対する態度を表明することは、「相手に許可を求める」などの、相手への働きかけなどとは明らかに異なるであろう。
- 12) 例えば、夫婦や親しい友人間で「今日はきれいだね」という「ほめ」に対し、「何か企んでるの？」あるいは「何かお願いでもあるの？」などと切り返すようなことが、ままあるのではないだろうか。

参考文献

- 大滝敏夫（1996）「ほめことばの日独比較」『日本語学』5月号
 川口義一・蒲谷 宏・坂本 恵（1996）「待遇表現としてのほめ」『日本語学』5月号
 小玉安恵（1996）「対話インタビューにおけるほめの機能（1）（2）——会話者の役割とほめの談話における位置という観点から—」『日本語学』5・6月号
 コンサーティアンウォン、サーヤン（2009）「ほめ言葉に対する返答スタイルの日タイ比較——親疎関係による返答スタイルの違いについて—」『間谷論集』第3号 日本語日本文化教育研究会
 ダニエル・ヴァンダーヴェーケン（1997）『意味と発話行為』久保進監訳 ひつじ書房
 滝浦真人（2008）「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス——その語用論的相対性をめぐって—」『社会言語科学』第11巻第1号
 初鹿野阿れ・岩田夏穂（2008）「選ばれていない参加者が発話するとき——もう一人の参加

- 者について言及すること—』『社会言語科学』第10巻第2号
- 古川由理子（2002）「「ほめ」の種類—受け手に直接関係のない「ほめ」を中心に—」『日本語・日本文化研究』第12号 大阪外国语大学日本語講座
- 古川由理子（2003）「書き言葉データにおける〈対者ほめ〉の特徴—対人関係から見た「ほめ」の分析—」『社会言語科学』第10巻第2号
- ブレイクモア・ダイアン（1994）『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門—』武内道子・山崎英一訳 ひつじ書房
- 戸江哲理（2008）「糸口質問連鎖」『社会言語科学』第10巻第2号
- 山路奈保子（2006）「日本語の「ほめ」についての一考察—「ほめ」を攻的に作用させる要因の分析—」『日本語教育』130号
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1978) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge university press.
- Cameron, D., McAlinden, F. and O'Leary, K. (1988) Lakoff in context: the social and linguistic functions of tag questions. Women in their speech communities: new perspectives on language and sex, ed. by Jennifer Coates and Deborah Cameron, 74–93. New York: Longman.
- Herbert, R.K. (1989) The ethnography of English compliments and Compliment responses: a contrastive sketch, *Contrastive pragmatics*, Oleksy, W. ed, John Benjamins Publishing Company.
- Holmes, J. (1984) Hedging your bets and sitting on the fence: some evidence for hedges as support structures. *Te Reo* 27, 47–62.
- Holmes, J. (1987) Compliments and compliment responses in New Zealand English *Anthropological Linguistics*, vol. 28, no. 4.
- Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive language Ogden, C.K. & Richards, I.A. *The meaning of meaning-a study of the influence of language upon thought and of the science of symbolis*, Routledge & Kegan Paul 石橋幸太郎訳『意味の意味』(1967) 池田書店。
- Manes, J. (1983) Compliments: A mirror of cultural values *Sociolinguistics and language acquisition*, Wolfson, N. and Judd, E. eds.: Newbury House.
- Wieland, M. (1995) Complimenting behavior in French/American cross-cultural dinner conversations, *The French review*, vol. 68, no. 5.
- Wolfson, N. (1983) An empirically based analysis of complimenting in American English, *Sociolinguistics and language acquisition*, Wolfson, N. and Judd, E. (eds), Newbury House.
- Holmes, J. (1984) Hedging your bets and sitting on the fence: some evidence for hedges as support structures. *Te Reo* 27, 47–62.

〈キーワード〉「ほめ」の機能、文脈、肯定的評価、否定的評価、皮肉・嫌味

When a Compliment Sounds Sarcastic or Offence

Yuriko FURUKAWA

A compliment is a remark used to show admiration, and to make a conversation partner feel happy, but in certain circumstances it can convey an ironic or offensive message. This paper exemplifies occasions in which a compliment functions contrary to its literal meaning. It is assumed that when there is a discrepancy between the talker and the listener about to whom/what a complimented is intended, and/or value judgment, a compliment can be interpreted as a sarcastic or offensive remark in that particular context. To test this hypothesis empirically, analyzing natural conversations between people in close relationships may be useful because in conversations with people in distant relationships people may not pry into hidden intentions.